

新美南吉記念館で開催している半田高等学校100周年記念企画展「南吉の中学生日記」(2月17日)より、南吉の中学時代を紹介する2回目。今回は南吉が半田中学校(半田高校の前身)で出会った人々についてとりあげます。

* * *

新美南吉は本名、新美正八といい、友人からは「シヨツパ」と呼ばれていました。生徒たちは教師にもあだ名をつけ、南吉の日記には「五右エ門」、「トツカピン」、「テツカン」などが記されています。南吉は、受験教育に熱心な教師より、文学に造詣の深い教師を慕いました。江口彰次先生の作文指導、遠藤慎一先生が選んだ英文学の副読本、佐治克巳先生主催の短歌会等、東京帝国大学出身の教師たちの影響を受けて、どんどん文学の幅を広げていきました。

活かす様子がみられます。

半田高校は、現在までに多くの著名人を卒業生として輩出していますが、実は南吉の身近にも有名な人物がいます。東浦町出身で、のちに万葉集の研究で大成した久米常民は、南吉の同級生でした。南吉とは特に親しい友人で、互いに何度も創作した文学作品を見せ合っています。

また常滑市出身で、第7代経団連会長を務めた平岩外四は、南吉の一年後に入学しました。寄宿舎に入寮の日、南吉が来て、「我思う故に我ありだよ」と哲学者デカルトの言葉を語ったそうです。読書家の外四に興味を持ったのか、南吉は友達になろうという手紙を渡しました。2人の交友はそれほど発展しませんでした。外四も南吉の家に遊びに行ったことがあるそうです。

当時の旧制中学校は義務教育ではなく、半田中学校は知多半島唯一の中学校として、将来の日本を担う優秀な若者たちが通う学校でした。裕福な家庭の子弟が多く通うなか

小さな畳屋の子の南吉が、優秀とはいえ進学したのは珍しいことでした。南吉は在学中、裕福で優秀な生徒たちに囲まれながら、学業面でも、文学の面でも成長していきました。その後、中学校を卒業した南吉は、体格検査が原因で受験に失敗します。順調に進学した友人たちは、南吉にとつて挫折をより強く感じさせる存在だったかもしれませぬ。しかしその後、彼らとの交友は続きました。恩師たちは、南吉の就職の世話もしており、半田中学校で得た人脈は、南吉のその後の人生を心身ともに支えています。



平岩外四
(昭7卒業アルバム)
提供：半田高等学校



久米常民
(昭6卒業アルバム)

アンケート

- Q1 今号でよかった内容や写真があれば教えてください。
- Q2 今号を読んだことがきっかけで行動したこと、または、したいことはありましたか。
- Q3 市報で取り上げてほしい内容や企画、広報に関するご意見・ご感想などありましたらお聞かせください。

回答方法

住所、氏名、年齢、アンケートを書いて、ご送付ください。

あて先

〒475-8666
東洋町2-1 企画課
Eメール
kouhou@city.handa.lg.jp



編集後記

今

回のバスの特集は読んでいただけたでしょうか。市民の方にバスについてもっと知ってもらいたいと考え、企画・取材をしました。いろいろな方にお話を聞いて、改めてバスを必要としている方が多いことを実感することが出来ました。

ちなみに、バスの語源はラテン語のオムニバスで、「すべての人のために」という意味だそうです。

特集を読んだ方が、「すべての人のための」バスに少しでも乗ってみよう、と思っただけであれば幸いです。

(浅野)